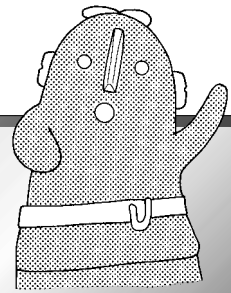


# 千代姥ヶ沢遺跡

～弥生時代のムラの跡～



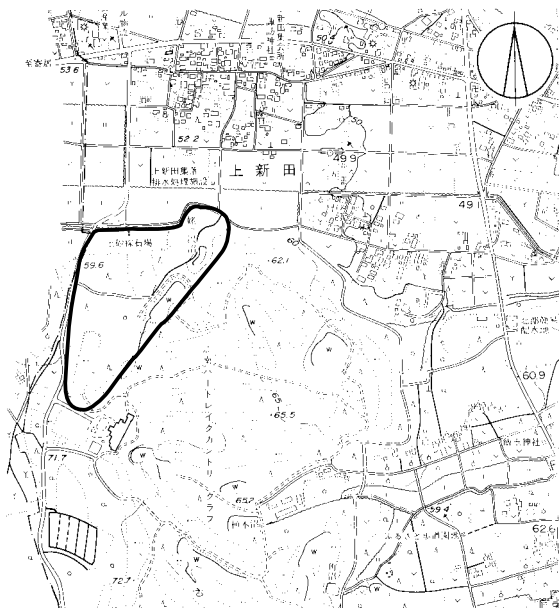
## はじめに

姥ヶ沢遺跡は、川本町に接する江南台地北縁部の、標高70m前後の平坦地に位置しています（第1図）。

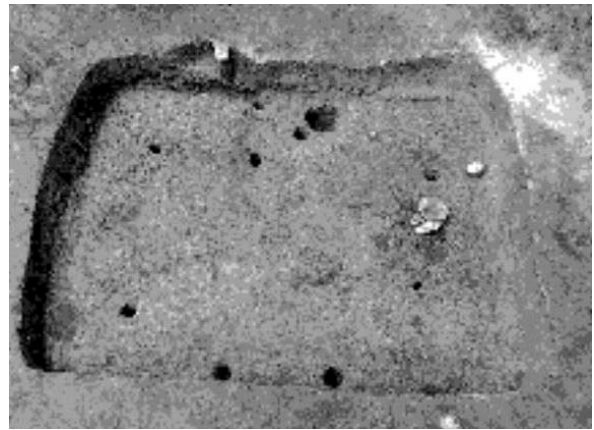
遺跡は、1982年に山林造成に伴い江南町教育委員会により約1,000㎡、また、1990年から93年にかけてゴルフ場の造成に伴い、千代遺跡群発掘調査会によって約24,000㎡の発掘調査が行われています。調査の結果、縄文時代の住居跡、弥生時代のムラの跡、古墳時代のムラの跡や埴輪窯跡がみつっていますが、今回は弥生時代について紹介したいと思います。

## 弥生時代について

弥生時代は『米』を『生産』し始めたことによって特徴付けられる時代です。今からおよそ



第1図 遺跡の位置 (1/20,000)



姥ヶ沢遺跡弥生時代住居跡

2,300年～1,700年前まで、約600年間続いた時代で、前期(紀元前300年～紀元前100年頃)、中期(～紀元100年頃)、後期(～紀元300年頃)に区分されています。

米作りは、中国の揚子江流域から朝鮮半島を経由し北部九州に伝わり、約200年程で本州の北端まで急速に伝わっていったものと考えられています。

県内では深谷市の<sup>じょうしきめん</sup>上敷面遺跡、岡部町<sup>しじゅう</sup>四十坂遺跡、美里町如来堂遺跡等で前期に位置付けられる土器が発見されており、埼玉県への弥生文化の伝播は、前期の段階であったと考えられます。

ムラの跡として確実なものは、熊谷市の池上遺跡、<sup>こしきだ</sup>小敷田遺跡、妻沼町飯塚南遺跡、美里町村後遺跡等中期中葉の段階で確認されています。これらの遺跡はすべて低地部に存在するのが特徴で、農村集落としては既に整備された姿を呈しています。

中期も後葉になるとムラの数は増大し、本格

的な農耕社会の成立となります。ムラは低地から台地上に移動し、土器は地方色が豊かになり、県北部には長野県から群馬県の影響を受けた櫛描文土器、県南部には南関東に広く見られる宮ノ台式土器がそれぞれ分布するようになります。

後期になるとこの二つの土器分布圏は、県南部には久ヶ原式土器、弥生町式土器といった縄文を施文した南関東系の土器が引き続いて分布するが、県北部では小地域とでもいうような土器の分布圏が形成されます。それは、櫛描文土器の系譜を引く樽式土器と、縄文施文の吉ヶ谷式土器で、異なる集団の存在が想定されますが、両者はほぼ同様の地域に分布し、一つのムラから混在して出土する場合も認められます。

姥ヶ沢遺跡ではこの両者が混在して確認されており(第2図)、両者の関係を考える上で非常に重要な遺跡であると考えられます。

## 遺跡の概要

本遺跡は、今からおよそ1,800年前の弥生時代

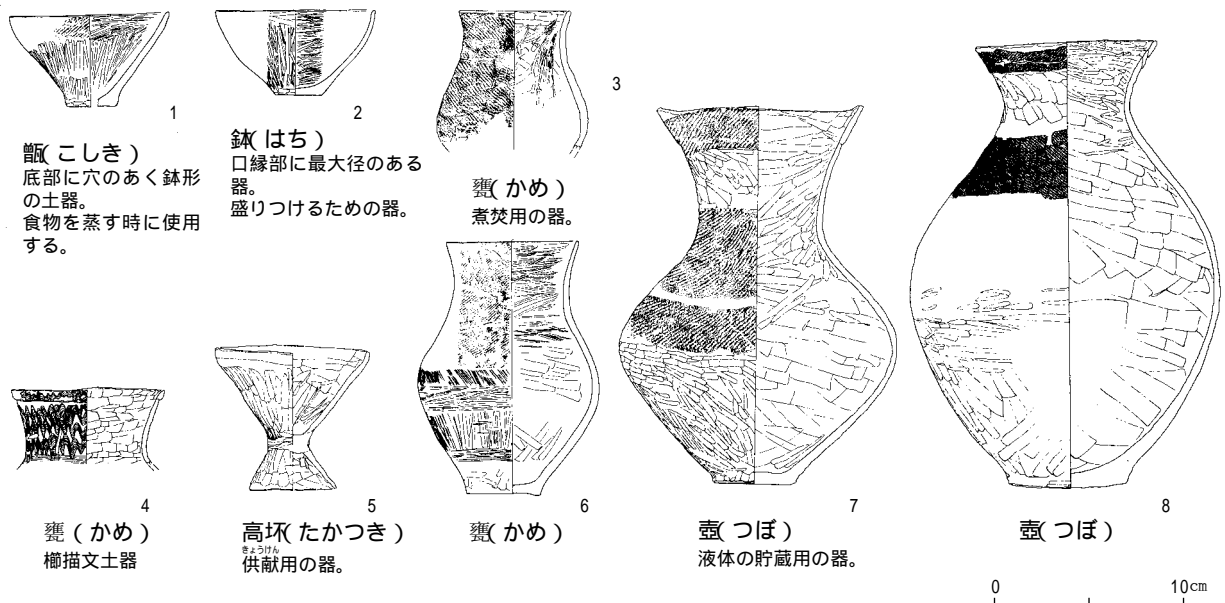
後期の吉ヶ谷式期と呼ばれる時期に属する住居跡8軒が確認されています。この他、屋外の貯蔵穴と考えられる土壇43基が確認されています。

調査面積は道路幅の狭いものですが、地形的な広がりを見ると、かなり大規模なムラの跡であると考えられます。立地から判断すると、このムラの人々は、度々氾濫したであろう荒川の沖積地部分ではなく、台地上の谷部に『田』を作っていたものと推定されます。

イ工は、地面を掘り窪めてつくった竪穴式住居と呼ばれるもので、平面は方形または長方形を基本としています。炉はいずれも床面を若干窪めただけの地床炉と呼ばれる簡単なもので、床面の中央からやや壁寄りに偏って設けられています。柱穴は細く、4～6本柱となるものが多いようです。

検出されたイ工は全て焼失しており、意識的なものか、過失によるものか興味の持たれるところです。

< 江南町教育委員会 >



第2図 姥ヶ沢遺跡出土弥生式土器